

学校の動物飼育の基本

適度な作業のための飼育舎の整え方

中川美穂子

(1) 始めに

本来、幼児期から小学校4年生までの子どもたちは動物に興味があり、触りたがり世話したがる。飼育活動はこの年齢の子にとって、興味を満足させ、やさしい気持ちを引き出し、世話したことで達成感を誘い、自己への自信と他のために働くとの責任感と勤勉性を培う。また友達と協力することによって、友達関係の改善を誘い、学校を楽しいと感じる感情を共有できるようになる。

このように「をいつでも、どこでも、だれにでもできる、子どもへの良い刺激になる飼育の実現」には「笑い声が漏れる飼育、適度な作業でたっぷりのふれあいを」になるような条件(図1)が必要である。

つまり子どもたちと学校にとって、作業の負担が多すぎる動物飼育は、活動そのものが面倒な仕事になり、気持ちも肉体的にも飼育舎から遠ざかり、結果酷い状態に動物を放置し、その状態を直視できなくなり、ますます飼育舎から遠ざかるため、飼育活動による教育的な意義は感じられなくなる。

笑い声のもれる楽しい飼育

* 適度な作業で、たっぷりのふれあいを *

- ・掃除しやすい飼育舎 ・コンクリート床・巣箱
 - ・世話の簡単な種類を少しだけ・チャボとウサギ(クリッパ)
 - ・繁殖を制限して、増えないように飼う
 - ・休日には保護者が当番児童につきそう(教育参加)
 - ・地域の獣医師の助言と支援を簡単に得られる体制を(自治体と)構築する
- ・基本・子どもの関心・愛情を培う・与え方・親しみ
飼育導入授業で子どもに親しみを持たせる

(2) 楽しい飼育にするための飼育舎

1 設置場所

子どもの関心を誘いやすく、動物も生活しやすい場所にする。

*子どもの身近に置く・子どもたちの遊び場か、校舎への出入り口近くに設置する。子どもが直接飼育舎の動物と交流できるように、周りに柵を設けない。

*暑さ寒さを緩和するため、落葉樹の陰を利用する(落葉樹の下に建てれば、夏は涼しく、冬には日が当たる)(図2)



図2 鉄棒のそばの大木の下の飼育舎
子ども来るし、冬は日があたり、夏涼しい

2 構造

・居室：家族単位で住むため、一種類の動物に1部屋を与え、2~4 畳位に1家族で、哺乳類と鳥類の2家族を飼いたい。ただし、動物が多くなると糞尿の量が増え、楽しい飼育からはほど遠くなるので、1家族は2~3匹までにするほうが無難。

・屋根：断熱効果のある建材を使い、動物が熱中症になる危険を減少する。また、冬の日差しを確保し、かつ雨の吹き込みを防ぐように軒を出す。できたら切妻がよい。

・外壁：東西両側少なくとも1.8Mまで壁を作り雨を防ぐが、壁が少ない場合でも、後述の巣箱で風雨を避けることができるだろう。

北側は全面壁にするが、三方向壁のため、夏季の熱がこもり動物の熱中症を招くので、風通し窓をつけて、冬には閉じると良い。他の壁は金網にして冬の日当たりと、子どもとの交流を確保する。

なお、寒い地方では、冬にビニール等の風よけをつける学校が増えているが、4月半ばまでに撤去し、飼育舎内の熱の上昇を防ぐように注意する。雪の降る地域では、厳冬期には動物を校舎内に避難させダンボールでケージを囲う、電熱シートや電球を利用するなどの工夫が必要。

・床はコンクリート：現在、「ウサギは土を掘る」「チャボは砂あびする」との考えで、土床の飼育舎が多いが、土床は、飼育舎を不潔にして



図3 コンクリート床、トイレが右隅にある
複数の水と餌入れて、水等不足を補う

掃除しにくくしている一番の原因である。餌の残渣や糞尿が除去できずカビ（水虫・真菌症）発生を招き、あるいは粉塵となり舞い上がることになる。このような飼育舎は不潔であり、私はわが子を入れさせたくない。

防水コンクリート床を、地表面より高くつくり湿気を防ぎ、床洗浄後、排水が水溜りを作らないようにきちんと傾斜をとり、壁の排水孔から外に出す（図4）。ただし、ネズミの進入を防ぎ、またゴミが外にでて排水管を詰まらせないように、排水孔に金網をつけること（排水口につけるような金具）。なお、吸い込みの暗きよに汚水を流し込むようにすると良いかもしれない。日々ゴミを掃きとり、また毎日水洗いする必要はないが、必ずゴミをとってから洗うこと。



図4
ネズミ防御
のある排水
孔。網目は
もう少し細
かいのが良
い。
(外観)

@トイレ：ウサギはトイレを覚える動物で、床の汚れを最低にして維持できる。ウサギ用のトイレも市販されているが、複数飼育しているので、飼育舎ではウサギゲージの下だけ、あるいは食器の水切りかごみたいな（大きさは3～40センチ角、高さ10センチ内外）のバットを使うと良い。バットに新聞紙を敷いて、その上に、足が汚れないように水切りの金網をおく。

なお、トイレの汚れが酷いと使わなくなるので、朝夕、バットの中に敷いておく新聞紙（あるいはウッドチップやペットシートなどの吸収材）を交換するが、これで床の汚れはほとんどないだろう。

なお、完成直後のコンクリート床にはアクがあり、動物の足の裏を傷めるため、毎日水を流してアクを除去して、2週間後に初めて動物を小屋に導入する。また、土中で寒さを避けることができなくなるため、巣箱を入れて寒さを緩和すること。木製の巣箱は足の裏の傷みを避けるためにも必要である。なお、ウサギを太らせすぎると体重が重くなり、硬い床で足の裏が傷むので、骨がやや分かる程度の肉付きにして、でっぴりと太らせないこと。

3, 巣箱

ウサギの隠れ場所としても、冬の寒さや風雨を避けるために巣箱が必要、またチャボには産卵のためにも必要。特に、防寒のために毎年10月下旬には整えて設置すること。



図5
ブロックに
乗せた木製
ウサギ用巣
箱。床から
離して湿気
と寒さを防
ぐ。

巣箱は、原則として一枚板で作る。新しい合板を使うと、動物は接着剤の臭気を嫌って巣箱に入らないことが多い。なおチャボはウサギのようにかじらないため、ダンボールで代用できる（図9, 10）。プラスチック製やスチール製は、寒さや暑さを緩和できないので、使わないこと。

・巣箱の寸法：間口45センチ、奥行き40センチ、高さ40センチ。前面に出入り口（ウサギ10センチ角、チャボ横10センチ高さ12センチ）を練りぬいた可動式の蓋をつける（図5）。この蓋を毎日あけて（図6, 11）、内部を掃除する。冬季（東京では10月下旬から）には、暖房のために新聞紙を入れて、毎日交換する。藁が暖かいが、費用がかかる場合は、交換を毎日しないため、くさく不潔になるので、迷わず古新聞を使うこと。

・置き方：巣箱を床に直接置くと水がかかるの

で、巣箱は直接床に置かないこと。また、豪雨の時、逃げ場がない飼育舎では、水溜りでウサギが溺死することが見られているので、逃げ場として高いところに巣箱を置くことも重要。



図 6
の巣箱の蓋を開けた状態。新聞紙などの巣材を敷いて毎日交換。厳冬期には特に必要。



図 7
ウサギさん、
出入り中

巣箱は、ブロックの上(図 6)や U 字管の上に置くが、棚を作って置ければその後の維持は楽になる(図 8)。巣箱を置く棚の奥行きは 70 センチ(40 センチ奥行きの巣箱を置いても 30 センチ近くの通路が残る)、高さ 30~50 センチ。



図 8 登り用スロープつき棚の上の巣箱
飼育舎の横幅いっぱい横板を渡して棚にして

も良い。高さが 30 センチあると、棚下を掃除しやすいし、ウサギが棚に上がるためのスロープは必要ない。50 センチになる場合は板でスロープを作るか、ブロックを積んで段を造り、ウサギが棚に上りやすくする(図 8)。



図 9
ダンボールの
チャボの
巣箱と缶を切
って天井から
つるした餌入
れ(餌のこぼ
れを少なくし
てネズミを防
ぐ



図 10
冬囲いの
ケージの中
のダンボ
ール巣箱。
11 月
から次年
4 月半ば
まで必要。



図 11
左図の巣
箱の蓋を
開けている

付記・飼育舎の床

床対策として、少し掘り下げてコンクリートの上に 20 センチぐらい土を盛るやり方が多く見られているが、水分の逃げ道がないため土は糞尿で湿気をよび、掃除不能のため、食べ残し

や糞のあるところの土にカビは生えて、結局管理できなくなる。そのため、カビが動物の爪だけでなく、腸にまで生えることになる。

また、砂利を入れてその上に地上 20 センチほどの土をいれ、トンネルを掘れなくする、あるいはブロックを敷き詰めるなどの案が見らるが、ウサギにとって、なんの意味もなく、トンネルを簡単に掘るし、土が汚れる。本来なら汚れた土は毎年交換が必要である。

とにかく、最初に苦労してコンクリート化すれば、後の維持が楽で、子どもたちは楽しく有意義な飼育を維持できるだろう。

4 水槽

アヒルなど水鳥の飼育以外ではプールは不要。また、アヒルや水鳥たちは水を激しく汚すので、毎日水替えが必要で、世話の負担がかかりすぎる種類である。この点で水鳥は飼いにくい。校庭での飼育には、世話の簡単なウサギとチャボが必要、かつ十分な飼育動物といえる。

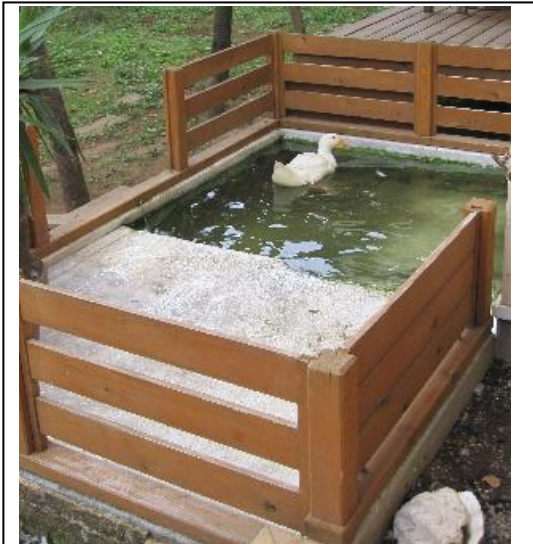


図 12 深さ 45 センチ、スロープで水から上がる。床や水をとも汚すので、毎日の水換えと排水の掃除が大変。

しかし、アヒルを飼う時は、脚を休めるためにプールが必要である。長さ 180 センチ、巾 90 センチ以上の大きさで、水深 45 センチにして足が底につかないように作る。また、アヒルが水から上がれるように斜面をつける。なお、アヒルを太らせると、どうしても脚に負担がかかりすぎ、関節や足の裏が傷むので、でっぷり太らせないこと。脚がすきっと伸びた立ち姿に維持すること。健康なアヒルはスピードで走ることができる。

5、運動場

特に必要ではないが、飼育舎に隣接して運動

場を作ると、掃除の時安心して出して置けるし、生活科の授業で良い交流の場にできる。しっかりした柵に囲まれたコンクリートの広場でも良いが、自然の土で草が生えたところが望ましい。土の場合、逃亡防止のため、土中の深さ 1 メートル、地上高さ 1 メートルの柵で囲うが、簡単な策や網で囲っている場合でも、掃除の間だけとか、ふれあい時間だけなど、人が見ている時にウサギを運動場に出すのなら問題がないだろう。しかし 10~20 分でも、目を離れたままにすると、穴を掘ったり、網をくぐったりして逃亡して行方不明になる確立が高くなる。

もしも、ウサギが穴を掘って逃げ込んだ場合は、すぐになんか穴を掘り返して、ウサギを回収すべきである。時間を置くと、大きな穴居をつくり、逃げ道もいくつもつくるため、回収は不可能になり、近所の畠を荒らす恐れがでてくる。

なお、運動場にウサギを出したままにしておいて、カラスや猫が餌にした例がある。またこれらがこないような安全な運動場にしたら、今までのように自然繁殖のままにしていたら、たちまち 30 匹、100 匹になった事例も報告されている。オスメスの繁殖を予防して丁寧に飼って、子どもたちが安心して愛情をかけられる環境を整えたい。

@なぜ逃亡するか？

ウサギやチャボたちにとって、その場所が安心できない場所だからだと言える。飼育舎が、掃除もしてあり、餌水も用意され、安心できる場所なら、動物は逃亡せずに戻ってくるのが普通である。

動物を怖がらせないように接するように、子どもたちを指導して、心に響く飼育活動をさせていきたい。

「動物の世話するときは、静かに声をかけてあげて、歩き方も、箸の使いかたもそっとして、動物を怖がらせないように気をつけてね。仲良くしたかったら、動物の好物を差し出して、優しい気持ちでじっとまっているのだよ。信頼したら、そばに寄ってきてくれるよ！」「一日や二日優しくしたら信用されるかと思っても、とても無理！それに世話するみんなが、同じ気持ちにならないと、子どもを見たら逃げるようになってしまうんだよ。」